
大人の階段…

来実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大人の階段：

【Nコード】

N4938I

【作者名】

来実

【あらすじ】

快青です。甘甘にしたつもりです。微エロなので、苦手な方はお引き取り下さい。

「快斗ゝいるのー？」

快斗の家の階段を、彼の名前を呼びながら登る。

快斗んちの玄関に忘れ物を取りにきたただけなんだけどね。やっぱり、会いたいから。

トン…

部屋のまえで、無意識に足を止めてしまった。ドアの向こうにいる彼に、心の中で問い掛ける。

『快斗…あたし…そんなに子供っぽいかな…。』

そう。青子は今快斗との事で悩みを抱えている。

長い幼馴染時代をようやく終えて、付き合いだしたのが3ヶ月前のこと。そろそろ恋人らしい事をしてもいいころなのに、ふたりは今まで軽いキスどまりなのだ。

ギイ…

青子は静かに扉をあけた。

「快斗…？」

ベットの上でうたた寝しているのが目に入った。昨日キッドの仕事をしていたから、疲れているのだろう。

青子は、静かに快斗に近寄ると、ベットの脇に膝をついた。

「…綺麗…」

長い睫毛。通った鼻筋。綺麗な髪。
その整った顔立ちは、明らかにそのへんの女より美しい。

「…ずるいよ…」

青子は快斗の頬に優しく触れた。

「…だけど大好き」

そう言って、快斗の唇に触れるか触れないかのキスを落とした。

―瞬間、快斗が起き上がった。

「…ひゃっ！いきなり起き上がらないでよバ快斗っ」

「何してたのかな？青子ちゃん♪」

青子の顔が、かあっと赤くなる。

「かつ快斗のエッチ！」

「エッチは青子だろ。俺、青子にまだ手エだしてないよ？」

「……………」

快斗は、珍しく言い返してこない青子を不審に思った。

「…青子？」

青子は俯いてしまっていて、表情を読み取ることができない。

「…どうしたんだよ？」

「…青子、子供っぽい？」

「…へっ!?!」

顔を上げた青子の瞳は、潤んでいた。

（青子の瞳超うるうるしてるし、頬、ほんのり赤いし…超可愛いんですけど。そんだけ色っぽい表情しといて、なんの心配してんだよ…）

「いや、そんなことねえよ？」

「嘘!?!」

「嘘じゃねえよ」

つい口調を荒げてしまう。

「嘘のくせに! 快斗の嘘つき!」

「嘘なんかじゃねえったら!」

「じゃあなんで…!」

青子は、言いかけた言葉を飲み込んだ。

「……んっ……うん!？」

青子の体がビクッと反応した。快斗が、無理矢理舌をいれてきたからだ。

青子が離れようと抵抗するが、快斗はそれを許さない。

「…ん…ふ……んうっ……んあ…」

快斗は青子の口の中を蹂躪する。逃げる青子の舌を、無理矢理絡めて逃がさない。

「…んん…んうっ!」

「はぁ………」

「……い、いきなり何するの!？」

「…悪い。あんま青子がバカバカ言うから…」

「なにそれ…」

(ひどいよ…好きだからとかなら許せるけど、青子を黙らせるためなんて…)

「…いや、ちょっと違うか…」

「…ふえ？」

「…あんまり青子が色っぽい顔で駄々こねるから、理性を崩されたって方が正しいな」

「…嘘…。青子色っぽくなんてないもん…」

「性格は子供っぽいところあるけどな。青子、俺を見上げる時どんな顔してるか気づいてないだろ？」

「見えるわけないでしょ！」

「だろ…？めっちゃ色っぽい顔してるの知らないだろ？」

「…してない、もん…」

「ほら、その顔。超そそられる…」

「…ひゃっ!？」

快斗は、青子の首筋にキスを落とす。

「…ちょ、かいと……やあ、ん…」

青子の白い肌に、朱い花が美しく咲く。

「…やんっ…かいと…やめ…っ」

「…無理。止まんねー」

「…なんで…あっ……………ひゃんっ！」

「イイ声…」

「やつ…そんな付けないでよお……」

「青子は俺のって、証が欲しいんだよ…。本当はずっと、こうしなかった。」

そう言って、首筋…肩…胸元…至る所にキスを落とす。

「…やんっ、もう、む…り…んっ」

その時、ふと、快斗は青子の顔をのぞいた。

「…………青子？泣いてんの？」

青子は、真っ赤な顔で目に涙を浮かべている。

「だって…恥ずかしいよう…。青子、こんなの初めてだもん…」

（そっか。青子、経験値少ないもん…。いきなりキスマークなんてつけたら、ビビるかあ…）

「そか。じゃあ…今日はこのへんにしとくよ…。けど、いっこ聞いとく」

「へっ？」

「さっきの『なんで…』の続きだよ。子供っぽいだけだったら、意味繋がらないだろ」

「そ、それは…」

「それは？」

青子はしどろもどろになってる。超可愛い♪こんな顔されたら押し倒したくなるって、気づいてないんだろーな…

「ひ、秘密だもん!!」

「ダメ。言わないと、こうだよ？」

そう言って、俺は青子の首筋に顔を近づけた。

「えっ、だ、だめ!言う!言うから待って!!」

(そんな嫌がらなくても…。結構傷ついたよ俺…)

「あ、あのね。快斗が…その…軽いのしか…だから…」

「そんな声じゃ聞こえないぜ？ 軽いなに？」

「……軽いちゅーしかしてこないから：／／／／／」

「……………っ！！！！」

「そ、それで自分に色気がないと思ったのか？」

「…う、うん」

はあ、と快斗は軽くため息をついた。

（コイツ…わかってないな、俺の苦労…）

「…あのな、青子？」

「な、なに？」

何言われるのかな、呆れられちゃったかな、なんて考えている青子は、少し緊張した面持ちで快斗を見上げる。

「…俺はね、青子が好きなんだよ？」

「ふえっ？」

予想外の快斗の発言に、青子は素っ頓狂な声をだした。

「…この世で一番、大事なんだよ。大事にしたいんだよ。」

「……………?」

「…わかってないだろ、お前。」

「…うん?…えっとお…快斗は青子を好きでいてくれてるんでしょ? 青子もね、快斗大好きだよ?…でも青子は色気なくて、だから快斗は何もしてこなくて…矛盾だよ? それとも快斗、色気ない女の人が好きなの??」

「…あのなあ…!」

「うん?」

(ここまで鈍感な女、めったにいないよな! まあそこが可愛いんだけどね)

「…気づけよ。俺が我慢してた事くらい! 言っただろう? 青子が大事だって。だから、手エ…だせなくて。青子を、壊してしまいそうで…」

「青子、壊れたりしないよ?」

「…んなの、わかんねえよ…。俺、絶対歯止めきかなくなる。さっきも…結構やばかった。」

「大丈夫だよ！青子人間なんだから！ロボットと違うもん。壊れないもん！それにね…」

「…それに？」

「青子は、青子の事で快斗に我慢とかして欲しくないよ。青子という時は、くつろいでて欲しいの！」

（そんな顔で、んな可愛い事言うなよな…）

「くつろいでて欲しいし、それに！」

「…それに？」

「青子も快斗に触りたいもん！…！！！」

「……………！？」

プツン

「…ごめん青子変なこと言った。…忘れて？」

「…無理」

「えっ？ …ひゃあ！？」

「…んっ…んう……………」

快斗は青子の頭を引き寄せて唇を奪った。

「…ん…ふっ…んあ………」

しばらく舌を絡めて、我にかえった快斗は、青子が苦しそうなものを見て唇を離した。

「…はあ…い、いきなり何するのよ！」

「あれ？ 誘ったんじゃないんだ♪」

先程とうってかわって悪戯な顔をする快斗。

「ち、ちがつ…！……………違わない…かも…」

「だろ？ しっかし、そっかぁ～！ 青子が欲情してるなんて知らなかったなあ♪ そういうえばさっきも寝込み襲われたもんなあ☆」

「ぼっ…ば快斗!!!! いやらしい言い方しないでようっ!」

「間違っていないだろ? でも、ラッキー♪もう我慢しなくていいんだな。お誘いもあった事だし?」

「…っ!…: / / / /」

真っ赤な青子を、快斗は抱きしめて耳元で囁いた。

「襲っても…いい?」

「…だめ…」

「やだ」

「わがまま快斗…」

「…好きだよ?」

「うん、青子も好き…」

「「大好きだよ…」」

どちらからともなく唇を重ねたふたりがどんな夜を過ごしたかは、
ふたりだけの秘密————

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4938i/>

大人の階段…

2010年10月16日00時45分発行